

教育実習の事前指導と実習校実習充実に関する一考察

—学生への事後アンケート結果の分析をふまえて—

渡津英一郎（現代中国学部教授）

はじめに

専門的な職業に就くには、机上の知識だけでなく実践的な資質能力が求められ、事前に一定の実習を必要とされるものが多い。教育実習は教育職員免許法施行規則において、教員の免許取得を希望する者に課せられたものである⁽⁰¹⁾。教育職員免許法により履修生は、2～4単位の実習校における実習と、その後大学において1単位の事前指導を受けることとされている。事前指導は、実習を無難にやり遂げるためだけのものではない。それまでの教職課程の授業で学習したことを、相互に関連づけたり教育実践に結びつけてみようとするものである⁽⁰²⁾。

実習制度が成立した頃と比べ、昨今の教職課程履修生の実態や教育実習を取り巻く環境は大きく変化している。実習生の多くは四年生である。事前指導と実習の頃は、民間企業への就職活動や公務員試験の受験勉強の時期である。実習に参加する学生の多くは、教職への強い意欲・情熱をもっているが、当初から教職だけを目指していたとはいえない⁽⁰³⁾。まして今年も、民間企業の採用日程が変更になったこと、景気が上向き大企業への就職チャンスであることから、この時期の学生の教職への心の揺らぎはこれまで以上のものがあると思われる。学校現場では、せっかく指導しても教員にならない学生、実習生の準備不足や資質能力の低さが問題視されている。

これに対し、採用試験受験を実習参加の条件とする等、厳しい対応策をとっているところもある。

しかし、教員採用試験に合格できなければ、実習はほとんど価値のないものになってしまう。教職と教職以外双方への就職可能性を残し、限度一杯のところまで最終的な決断をしたいという学生の立場も理解できる⁽⁰⁴⁾。このことに厳しい条件をつけるようになれば、他の職業でも獲得したいであろう基礎的・汎用的能力をもつ学生は、早々に教職以外に移ってしまう可能性がある。教職課程、とりわけ教育実習の在り方は、常に時代の要請と状況に対応していなければならない。以上のことから本稿では、学生の側から見た教育実習の実態と感想を確認し、現段階でのより適切な実習指導の方法と、併せて今後の実習制度の在り方を提起することとした。

一、教育実習前後の履修生の意識と就職活動

学生の就職活動の解禁時期が、三年生の12月から3月へと3ヶ月遅くなった。「高等教育の趣旨を踏まえ、採用選考活動にあたって、正常な学校教育と学習環境の確保に協力し、大学等の学習日程を尊重する」として改善されたものである⁽⁰⁵⁾。2015年の卒業生まで、インターンシップは三年生の12月まで行い、エントリーは12月1日に解禁され企業説明会

も並行して行われていた。面接・試験は4月から6月にかけて行われ、内定が出たのは5月から7月だった。これに対し2016年からは、インターンシップが三年生の3月までとなった。エントリーは3月1日に解禁され、企業説明会もここから行われることとなった。面接・試験は8月から10月に、内定が出るのは9月から10月となった。インターンシップに参加する期間が長くなり、選考の時期は遅くなり期間は短くなった。

しかし、今回のこの協定は企業側を拘束するものであり、学生の就職活動を3月まで制限するものではない。また協定が結ばれても、外資系企業やベンチャー企業は倫理憲章にとられないであろうこと、協定の拘束力が低いことから、改善による学業への影響がどのくらいあるのか現時点では明らかでない⁽⁶⁾。

大学では教職課程を履修している学生に対し、ほぼ1年前に実習の事前ガイダンスを実施している。これは主として、教育実習に参加する意思の確認と、実習校に依頼する手続きを説明するためである。実習校決定までの手続きとして、学生は義務教育の場合は教育委員会に、高校の場合は自身の卒業した学校に申し込む。教育実習は大学の教職課程にある履修科目であり、その教育活動である。しかし、実習の申し込みは対外的に、教職に就く意思を表明し、教職に一步踏み入れる機会となる。学生は実習の申し込みを通して、他の学生に先駆け就職活動を開始することになる。

実習校への申し込みの後、学生は徐々に採用試験を意識した本格的な受験勉強を始め

る。一部の学生は、9月頃から業者の教員採用試験受験講座を受講するようになる。またこの頃、各地の教職採用の二次試験の結果が発表され、講座の受講生には大きな刺激となり、より屈強な教職への意志を固める時となる。

四年生の4月になると、大学の事前指導が始まる。4月上旬から6月にかけて、教員採用試験の願書を提出するようになる。実習の1ヶ月前には実習校の事前指導があり、5月の初めから6月にかけて、2～3週間の実習校における実習となる。採用の一次試験は7月上旬から下旬に迫っている。教職課程を履修している学生にとって、この3月から8月までの時期は、教職に専念するか否か最終的な決断を迫られる時となっている。

実習前後の意識と就職活動について、今年度、教育実習に参加した学生に、民間の新しい採用日程や最近の好景気が、教職への意志にどのような影響があったか尋ねてみた⁽⁷⁾。

景気が上向いており大企業への就職のチャンスといわれているが、教育実習や採用試験の勉強に影響があったかという質問<01>に、「大きな影響があった」と答えた学生は1名、「少なからず影響があった」という学生は5名だった。その他の学生は、「ほとんど影響ない」「全く影響ない」と答えている。

民間の新しい就職協定を知っているかという質問<46>には、半数の学生が「よく知っている」「だいたい知っている」と答えている。しかし、このことが学生自身の就職活動に影響を与えたかという質問<47>には、1名の学生が「大きな影響があった」、6名が「ある

程度影響があった」と答えた。それ以外の学生は、「ほとんど関係ない」「全く関係ない」と答えている。

新しい就職協定が、教育実習や採用試験の勉強に影響を与えたかという質問<48>には、4名の学生が「ある程度影響があった」と答えたが、それ以外の学生は「ほとんど関係ない」「全く関係ない」と答えている。教育実習直後まで、自己の職業について教職を主に考えてきた学生には、景気の動向も新しい求人日程も、実習への参加や採用試験の勉強にはあまり影響がなかったといえる。

ただし、事前指導の頃に教職以外への期待と教職への不安が大きくなったかという質問<02>には、1名の学生が「大きくなった」、8名が「少なからず大きくなった」と答えている。事前指導の頃、教職を目指してきた学生にとって、多くの環境変化は就職活動に影響がないとしながらも、教職以外の情報と他の学生の動きに内心は動揺していたといえる。

二、時間的視点からみた事前指導と実習校実習

1987年の教員免許法改正により、教育実習の単位が1単位分増加した。これは、教育実習に係る事前及び事後指導に1単位追加されたことによるものである。必修科目の一部とされた事前指導は、カリキュラムの中に組み込まれ、およそ毎週1時間30分の指導が7回実施されることとなった⁽⁰⁸⁾。教職を目指している学生は、実習に向け事前指導の段階から時間をかけ、本格的な事前準備を行うこと

になる。

さきの調査では、事前指導と実習校実習の状況と学生の意識について、時間的な視点から尋ねている。

実習前、教育実習のためどのようなことに時間を費やしたかという質問<03>には、すべての学生が「教材研究&指導案の作成」と答えている。正式採用後の教員には、授業はすべての教育活動の基本として、徹底した教材研究が求められる。学生も同様であると受け止め、教材研究と指導案の作成に時間をかけている。

1997年には、中学校の教育実習の単位数が従来の3単位から5単位に増加した⁽⁰⁹⁾。実習校実習は、高校2単位～中学校4単位となった。仮に2単位とすると、大学の講義では1時間30分の15回となり23時間程度となる。これに対し、1日の実習時間を、通常の教員の勤務時間と同程度とすると、約8時間の10日間で総計80時間となる。通常講義のため時間外に講義の準備をする時間や、実習の時間内に実習授業の準備時間もあるが、その分加減しても教育実習は普段の講義よりかける時間は大幅に多い。

実習中の自宅を出てから帰着するまでの時間についての質問<04><09>では、朝早い学生は6時15分に家（自宅等）を出て、20時45分に帰着している。帰着が遅い学生は、朝は7時00分に出かけ、22時20分に帰着している。平均すると、7時00分に出かけ20時00分に帰着となり、自宅を出てから帰着までの時間は13時間00分ほどである。

また、実習校滞在時間についての質問<05>

〈07〉には、朝早い学生は6時45分に学校に入り、19時45分に学校を出ている。滞在時間は13時間30分である。学校を出るのが遅い学生は、朝は7時20分に学校に入り、22時00分に学校を出ている。14時間40分の滞在時間である。平均すると、7時30分に学校に入り19時30分に出たようで、滞在時間は12時間00分である。

なお、実習校教員の始業時間についての質問〈06〉では、8時10分から8時40分が多く、実習生はその40分から70分前に学校に入っている。実習中の自宅を出てから帰着までの時間、実習中の学校に入ってから校門を出るまでの時間からは、長時間の実習が行われている実態が確認できる。実習校は、小中学校・高校のいずれも現住地に近いところが多く、通いの不便さから長時間となった例はほとんど無い。実習校教員と学生が校門に入る時間に大きな差はなく、学生が早く行かねばならない雰囲気はなかったようである。むしろ長時間の実習は、他の質問でも明らかなように、事前の準備が不十分であること、もしくは現場の雰囲気から過剰に不安や責任感が高まり、自らの意志で実習校にいる場合が多い。

業後、どのような活動に時間を使ったかという質問〈08〉には、「教材研究」「指導担当の先生からの指導」とそれぞれ7名が答えている。その他と答えた学生が2名いるが、その内容は「実習記録の記入」である。以前の調査では、教職の魅力に部活動の指導をあげた学生が多かったが、実習中この時間を充分確保できたのは2名だった⁽¹⁰⁾。

実習校では教材研究に多くの時間を割いて

いるが、自宅に帰ってからの時間についての質問〈10〉では、引き続き教材研究に取り組んでいる学生が多い。1時間から3時間という回答が多く、平均2時間以上で何もしない学生はいない。学校での滞在時間が長く、持ち帰りの教材準備も多いことから、睡眠時間にも影響が出ている。実習中の睡眠時間についての質問〈11〉には、3時間30分から6時間と答えており、平均は4時間40分程度と短い。普段の睡眠時間〈12〉は4時間10分から8時間であり、平均すると6時間10分程度である。平均1時間以上の差があり、この状態が2週間程度続いたことになる。

計画的に採用試験の勉強を始めなかった学生は、教育実習に多くの時間が割かれ、試験勉強にも相当の時間を要することが次第に実感できるようになる。採用試験の結果にある程度の否定的な見通しがつくようになる。そこで、既に事前指導の段階から実習参加は免許取得のためだけ、採用試験は受験するだけとし、民間の就職活動をしながら実習に取り組むこととなる。中には事前指導の時点で、教職を断念し辞退を考える学生も出てくる。

これに対し、受験勉強を本格的に始めた学生は、3月～4月にそれまで以上の時間をかけ勉強する予定だった者が多い。しかし、教育実習に多くの時間が割かれ、時間的な見込み違いを感じずる学生が多くなる。民間企業を受験する学生は、志望する企業を選別し着実に就職活動をしている。従って、教育実習と採用試験の準備に打ち込みつつも、教職だけでは不安となっている。教育実習の準備は綿密に行っており、教育実習を経て教職への意

欲・情熱は高まる。一方、教育実習に多くの時間を割き、その分十分な受験準備とはいえない状態で採用試験に臨み、就職について急激に不安が増すようになる。その後、これらの学生は急速に進路を変化させることが多い。

受験勉強を本格的に始めた学生の中には、教育実習に多くの時間が割かれ、その分、採用試験の勉強ができなくても、事前指導に従って着実に実習の準備をしている学生がいる。教職に専念し、持てる力をすべて教育実習に注いでいる。実習後は再び採用試験の勉強に専念することとなる。

いずれの学生にとっても、実習は時期的・時間的に予想以上の大きな負担となっている。しかし、期待した以上に感激し教職への意欲を高めることが多い。

三、実習校実習への取組と教職への意識

実習は教員免許取得の条件とされており、四年生の厳しい状況の下でも必ず行わねばならない。しかし、実習の期間は、教職を目指す学生にとって、それまで生徒の側からみてきた教育活動を、教員の側に立って身近に観察し体験できる貴重な機会である。時が過ぎれば、大変な仕事を成し遂げたという達成感だけでなく、大きな感動を味わうことができる。

そのため事前指導は、実習をより充実させるため、大学で学んだ理論と知識をもって参加する際、学生が観察・経験すべきもの、またそのための機会や方法等を指し示す時ともなっている。その取り組み次第で学生は、授業以外のことにも無駄や無理なく参加し、実

習は味わい深いものとなり、教職への意欲・情熱を高めることができる。調査では、学生が実習校で実施した活動の状況と感想について尋ねている。

教科指導では、担当教員から指導案について何時間指導を受けたかという質問〈17〉では、多い学生は30時間、平均約10時間の指導を受けている。また教育実習中、研究授業等の事後指導（高評）は、何名から何時間受けたかという質問〈18〉〈19〉には、5名から15名が多く、平均9名の教員から指導を受けている。また指導を受けた時間は、平均3時間30分と答えている。実習期間が2週間から3週間と異なるものの、多くの時間を割き指導してもらっている。

ホームルームの指導では、実習期間の終わりまでに生徒の氏名が覚えられたかという質問〈20〉に、あまり覚えられなかった（全生徒の0～30%）学生は2名、ほぼ覚えた（全生徒の50%）と答えた学生は3名、よく覚えた（全生徒の80～100%）学生は13名だった。うち、100%と答えた学生は7名、80%と答えた学生は6名である。ホームルーム活動を指導する際、生徒の氏名を覚えることは重要である。多くの学生はほぼ全員に近い名前を覚えており、実習生としての意欲が感じられる。

ST・LT以外の時間に、生徒と何時間一緒に過ごすことができたかという質問〈21〉には、10時間以上は8名（うち15時間以上は5名）、30時間という学生が1名、平均は13時間だった。生徒と一緒に過ごす時間は、意識してつくらなくても実習は過ぎていき、実習

生が積極的にならない限り時間は確保できない。一部の者を除き、ほとんどの学生が、生徒の中に入ろうと努力していた様子がうかがえる。

部活動には、実習中何時間その場にいることができたかという質問〈22〉〈23〉に、9名が総計10時間、5名が1時間から9時間と答えている。平均7時間20分だった。部活動にあまり時間を使わなかったのは2名だった。時間数が多かったのは陸上部を担当した学生の16時間だった。部活動指導を教職の魅力としてあげる学生は多いが、授業の準備に追われ、1日について1時間程度が限界のようで、多くはそれ以下となった。

部活動の指導内容についての質問〈24〉には、12名が技術指導、1名が生活指導、2名が下校指導、2名が安全指導と答えている。高校で実習をした学生は母校実習が多く、それまでの経緯もあり、限られた時間の中で技術指導ができたようである。部活動は指導要領に重要な役割が確認されたものの、未だ十分な条件の下で実施されているとはいえない。それ故、事前指導では、教員以上に実習生の指導には慎重さが求められることを強調した。従ってここでも、活動を身近に観察するだけでなく、指導したいという学生の積極的な意欲が感じられる。

生徒指導は、日常的な連続した観察や経験的な指導力が必要である。実習生が指導できる場面は少ない。学校生活で気になった生徒についての質問〈25〉〈26〉では、服装、頭髪、スマホ、遅刻等が挙げられた。実習生は免許取得前の段階にあり、指導の経験も無いに等

しい。従って指導すべき場に直面しても、正規の教員と同じ指導はできず、その機会は少ないはずである。にもかかわらず、服装や自転車の二人乗り等について、指導すべき時と判断した一部の学生がその実践を試みている。この場合には、実習生として経験したいというよりも、実習の機会といえ生徒のために指導したいという、正規の教員のような情熱を感じることができる。

個人的に生徒から相談を受けたかという質問〈27〉〈28〉には、9名は受けた、9名は受けていないと答えている。その内容は、勉強、テスト、進路、受験、部活、いじめと多岐に亘っている。生徒は実習生に大きな関心と親しみをもち、いずれの学校でも相談を持ちかけられるとして、事前指導では応え方とその限界を示しておいた。半数がその機会を得ており、自信もって適切に対応できたようである。

更に調査では、実習校教員の勤務について、学生なりに観察した実態と感想の回答を得ている。実習校教員の教職への意欲・情熱について、自身が生徒の時と比較してどう感じたかという質問〈13〉に、12名が期待以上、6名が期待したとおりのものを感じたと答えている。生徒であった時の方がという学生はいなかった。実習校教員の姿から、生徒の時に理解できなかった、より良いものを感じることができたようである。学生は再度、目指すに値する教職の職責と大きな魅力を感じたと思われる。

実習校教員の勤務時間は、平均して何時間くらいだったかという質問〈14〉には、14名が

10時間前後、3名が9時間前後、1名が8時間前後と答えている。所定の勤務時間より少ない7時間前後と答えた学生はいなかった。教員の1日の休憩時間は何時間くらいかという質問<15>には、5名がなしと答えている。1名は10分、4名が30分、7名が1時間、1名が2時間以上だった。このことにより、教員の勤務時間は長いと感じるかという質問<16>には、10名が長い、7名が普通、1名が短いと答えている。

長時間の学校滞在について、実習校教員とは事情は異なるものの、学生も予想以上の長時間実習となった場合が多かった。実習校教員の時間に合わせ実習したのではないが、長時間の滞在によって学生は、勤務時間が長く休憩時間が少ない実態を確認できた。しかし、次の回答にもみられるように、実習後に教職の魅力を考えて時、このことが教職評価のマイナス材料とはなっていないようである。

実習を通して、教員の仕事は魅力的と感じるようになったかという質問<29>には、12名の学生が「感じるようになった」と答えている。魅力が感じられなくなったという学生はいない。また、教育実習を受けて、教員になりたいという気持ちが強くなったかという質問<30>には、同じ学生が同様に「強くなった」「実習前と変わらない」と肯定的に答えている。また、教育実習を受けて、他の職業の方が良いと思うようになったかという質問<31>には、4名が「ならなかった」と答えている。9名が「変わらない」と答え、良いと思うようになった学生は4名だった。

教育実習は、教師の仕事を観察し体験する

だけでなく、更に自己の教師としての適性を見極め決断する時とされる。調査からは、ほとんどの学生が実習を充実したものとし、一層の職責と魅力を実感し、教職への強い意欲と情熱をもつことができたようである。最近では、教職についての判断を、実習申し込み前の早い段階で見極めさせる必要性が強調される。しかし、実習参加者の多くは、実習を通じて期待した以上に教職への強い意欲・情熱を持つようになる。従って実習以降、本格的に教職への取り組みを始める学生がいることに適切な配慮が必要とされる。

四、適切な進路指導と実習校実習の今後の課題

調査では、教員採用試験の勉強と、実習前後の教職以外の就職活動への取り組みについても尋ねている。

採用試験の勉強を、何時間どこでどのように行ってきたかという質問<34><33><32>に、勉強していないという学生もいるが、総計30時間から500時間と費やした時間は様々である。試験勉強の場所は、11名は自宅、9名が大学と答えている。大学と答えた学生は、大学内で実施している受験講座の場を指している場合が多かった。教材は、受験産業のテキスト（大学内開講の受験講座や通信教育のテキスト）が11名と多く、大学の講義用テキストやノートと答えた学生は4名と少なかった。また、間もなく採用試験となるが、実習以降の勉強は、どのように行うかという質問<35><36>には、それまで同様の教材を用いるが、場所は大学でという学生が僅かに多く

なっている。なお、採用試験に向けての学習時間〈37〉は、1日1時間から8時間、平均2時間40分程度確保すると答えている。

教職以外の就職活動について、どのくらいの時間を費やしたかという質問〈38〉には、半数の学生が0日であり0時間と答えている。しかし残りの半数は、これまで総計200時間くらい、日数では10日から50日程度の就職活動を行っている。就職活動で関係をもった企業は何件かという質問〈39〉には、1社から20社までの回答があった。個人ごとの回答に一貫性のない点もあるが、半数は教育実習に参加しない学生とさほど違いのない就職活動をしている。

就職活動をしてきた（しなかった）理由は何かという質問〈40〉に、9名の学生は「教職だけに絞っているから」と答えている。しかし、それ以外の学生は「教職が第一希望だが試験の合格可能性が低い」「当初から教職だけを考えていない」を選んでいる。就職活動を進めてきた会社は、何を理由に選んだかという質問〈41〉には、「教職課程と関連がある」「子どもを相手の仕事だから」という答もあったが、8名が「将来性、安定性のある会社だから」と回答している。

教育実習後、就職活動を行うかという質問〈42〉には、既に内定を受けている学生もいるが、半数は「以降、より良いところを見つける」「一次試験を受け、その後直ぐ始める」「一次試験の合否結果をみて始める」と、一次試験を教職以外への進路変更の契機とすると答えている。なお、それ以外は、教職に絞ってきたので「以降も教職以外の就職活動はしな

い」という回答をしている。

今年度の採用試験が不合格だった場合、次年度はどうするかという質問〈43〉には、10名が学校現場で講師をしながら受験勉強と答えている。うち非常勤講師5名・常勤講師6名（重複1名）、7名が1年で諦めて他の職業に就くと答えた。勉強に専念し講師はしないと回答はなかった。次の年も採用試験が不合格だった場合、次次年度はどうするかという質問〈44〉に、教職を目指す10人は、再び学校現場で講師をしながら受験勉強と答えている。内訳も、非常勤講師5名・常勤講師6名（重複1名）と、1年で諦めず次の年も同様という学生がすべてであった。併せて、このような状態を何年続けるかという質問〈45〉には、3年までと答えた学生は0名、4年まで1名、5年まで5名、10年まで1名、20年程度1名となっている。2名は「変えない」と答えている。教育実習を通じて半数の学生は、より教職への意欲・情熱が強くなったことが確認できる。なおこの調査は、実習後間もない頃、採用試験前に実施したものである。従って教育実習の感激が、教職への意欲・情熱を高め期待が極度に高くなっている時のものである。

教育実習が終わるとまもなく、7月上旬から下旬までが採用の一次試験となる。今年、民間の求人日程に変化があったが、教職の採用試験に大きな変化はない。これまでも採用試験は、学生が教職を断念する大きな契機になっていたが、特に今年は教職に専念していない学生にはより大きな影響があると思われる。採用の一次試験が終われば、受験した学

生は結果の推測ができる。またこの時点では、少なくとも昨年よりも就職試験に出遅れた感じはしない。

合格発表は7月から8月にかけてあり、二次試験が8月後半になる。二次試験の合格発表は9月末から10月にかけてとなる。教職に専念するか否か、大きな決断を迫る契機は、昨年よりも今年の方が少しずつ早めになっていると思われる⁽¹¹⁾。

教職の資質能力と受験の得点力や合格可能性は必ずしも一致するものではない。少なくとも、これまでも高い資質能力をもった学生が、採用試験では不合格になる例は数多くあったと思われる。採用試験の準備を早期に始めた学生は、比較的優位に受験競争を乗り切り、合格可能性を高めることができる。受験競争に出遅れた学生は、教員採用試験を経て、教職への意欲・情熱を持ち続けたまま、せっかく身につけた資質能力を活かすことなく、他の職業に就くことが多い。

おわりに

本稿では、教育実習の役割と課題について、学生への意識調査をもとに考察してきた。教育実習が大変だったから、教職の魅力を感じなくなったからと離れていく学生は少ない。むしろ、教育実習を経て教職へのモチベーションが高まる学生は多い⁽¹²⁾。

より資質能力の高い教員を養成するためにも、よりすぐれた教員を確保するためにも、早期により幅広く進路を考えさせ、教職について見極めさせることは必要である。しかし、早期の絞り込みは、優れた資質能力をもった

教員候補の芽を摘んでしまうことにもなる。教育実習の頃まで努力してきた学生には、一時的な揺らぎに関わらず、個別の問題を解決しつつ事前指導を充実させ、充実感と期待が持てるようにし、教職への意欲・情熱を更に高めるべきである。教員採用試験は、何年も挑戦し続ける受験生がいるという実態がある。民間人の中には教職に関する高い資質能力もった人も多く、一部の人は可能性が低いにも拘わらず再度教職に挑戦している。社会人特別選考により採用された民間人が教員として著しい活躍している例がある。教育実習を受けさせるについて、現行制度の下では、学生に対して厳しい条件を示すだけでなく、併せて柔軟な対応も必要と思われる。少なくとも、過度な「絞り込み」「選抜」「淘汰」があってはならない。期待される人たちの、教職への機会を遅らせたり奪うことは極力避けるべきである。併せて、当面は、社会人特別入試や特別な免許制度の効果的な制度運用が求められる。

注

- (01) 教育職員免許法施行規則、第6条、別表1
- (02) 教育職員養成審議会答申「教育の資質能力向上方策等について」1987
- (03) 拙稿「教職課程を履修する学生の受講動機とその後の選択」愛知大学教職課程研究年報、第3号、2013、愛知大学 p.73、教職課程の受講理由
- (04) 岡田忠男・大森正・吉田辰雄編『教育実習の理論と実践－教師教育の望ましい在り方をめざして－』p.16
- (05) 一般社団法人、日本経済団体連合会「採用選考に関する指針」2012.9.16
- (06) 文部科学省、報道発表「平成27年度就職・採用活動時期の変更に関する調査(7月1日現在)の結果について」

2015.7.30

- (07) 教育実習アンケート, 調査実施時期2015年7月～8月, 本年度教育実習参加学生24名対象, 詳細本稿資料
- (08) 教育職員免許法改正, 1988, 必修科目として1単位分増加, 実習に係る事前及び事後の指導の1単位
- (09) 教育職員免許法改正, 1997, 中学校について従来の3単位から5単位に増加
- (10) 拙稿「教職課程を履修する学生の受講動機とその後の選択」愛知大学教職課程研究年報, 第3号, 2013, 愛知大学, p.75, 3.魅力ある職業としての教職志望
- (11) 同上, p.78-p.79, 就職活動の時期と教員採用試験
- (12) 「教育実習における課題と工夫－望ましい教育実習の姿から考える－」和泉研二, 河村義成, 徳田修二, 『SYNAPSE4』p.20-p.23, 仲間と協働し教育に関わることの大切さを実感する貴重な経験

資料

(調査概要)

1. 調査実施時期、目的
 - ・2015年7月～8月(前期教育実習を終えて一ヶ月以内、学生によって期日は異なる。)
2. 調査対象学生
 - ・本年度教育実習参加学生24名(男15名、女9名)のうち20名
 - ・20名内訳(18名の学生はすべて回答、後期実習の学生は調査1の1～3と調査2の九～十二のみ回答)
 - ・4名の学生については、辞退等の事由により未実施
 - ①男女
 - 男11名、女9名
 - ②実習校学校種
 - 高校11名、中学校8名、小学校1名
 - ③採用試験の学校種及び教科
 - 高校10名(地歴3名、公民2名、英語3名、商業2名)
 - 中学校9名(社会科7名、英語2名)、小学校1名、
3. 調査実施方法
 - ・質問の意図を正確に伝え、回答をより正確に把握するため、質問者が口頭で若干の説明を加えながら実施した。
 - ・質問項目はすべて掲載したが、本稿で取り上げなかった項目は質問番号に()を付けた。
 - ・回答は本稿に取り上げたものだけとし、本文及び資料

には< >を付け、掲載文の通し番号を付した。

(調査1) 教育実習と教職 (回答数20)

1. 今年は景気が上向いており大企業への就職のチャンスであるといわれている。このことは、自身の教育実習や教員採用試験に向けての意識や活動に影響があったか。
 - …<01>
 - ①大きな影響があった=1名、②少なからず影響があった=5名、③ほとんど影響はない=5名、④全く影響はない=9名
- (02) 今年度から民間企業の採用スケジュールが変更になったことをしていたか。このことは、自身の教育実習や教員採用試験に向けての意識や活動に影響があったか。
 - …<02>
 - ①大きくなった=1名、②少なからず大きくなった=8名、③ほとんどそのようなことはない=7名、④全くない=4名
- (04) 受験者の増加は、採用試験のレベルを高めるのに好ましいことだと思うか。
 - …<04>
 - ①学校現場では実習公害といい、実習者のレベルの低さを嘆いたりしているがどう思うか。
 - ②採用試験を受けない者には、教育実習を受けさせない等の対応がなされているがどう思うか。
- (07) 9月から教職実践演習が始まるが、採用試験に不合格となった場合、演習に臨む意識は変わるか。
 - …<07>
 - ①教材研究&指導案の作成=18名、②生徒指導=0名、③その他=0名

(調査2) 教育実習の反省から教職実践演習へ

一、教育実習と教職実践演習 (回答数18)

- (01) 教育実習事前指導は実習に役立ったか。
- (02) 教職実践演習を知っているか。

二、実習の準備と実習校への行き帰り (回答数18)

1. 教育実習のため、どのようなことに時間を使ったか。
 - …<03>
 - ①教材研究&指導案の作成=18名、②生徒指導=0名、③その他=0名
2. 教育実習中、実習校へ出かける時間は何時だったか。
 - 6時15分～7時15分、平均7時00分 …<04>

3. 教育実習中、実習校に入る時間は何時だったか。
6時45分～8時00分、平均7時30分 …<05>
4. 教員の朝の打ち合わせの時間は何時だったか。
8時05分～8時40分、平均8時20分 …<06>
5. 教育実習中、実習校を去る時間は何時だったか。
5時30分～10時00分、平均7時30分 …<07>
6. 業後、帰りまでに一番時間を使ったのはどのような活動か。 …<08>
①教材研究=7名、②部活動=2名、③指導担当の先生からの指導=7名、④その他(実習記録記入)=2名
7. 教育実習中、実習校から帰宅した時間は何時か。
6時40分～10時00分、平均8時00分 …<09>
8. 教育実習中、自宅での教材準備などに費やした時間はどのくらいか。 …<10>
1時間00分～3時間00分、平均2時間00分
9. 教育実習中、睡眠時間はどのくらいとることができたか。
3時間30分～6時間00分、平均4時間40分 …<11>
10. 普段の睡眠時間はどのくらいか。
4時間30分～8時間00分、平均6時間10分 …<12>

三、実習校と指導教員 (回答数18)

1. 実習校の教員の教職への意欲・情熱についてどのように感じたか。 …<13>
①生徒であった時に感じたよりも期待以上に熱心=12名、②生徒であった時と同様に熱心=6名、③生徒であった時の方が熱意を感じた=0名
2. 教員の勤務時間は、平均して何時間くらいと感じたか。 …<14>
①10時間前後30分以上=14名、②9時間前後30分=3名、③8時間前後30分=1名、④7時間前後30分以下=0名
3. 教員の一日の休憩時間は平均して何時間と感じたか。 …<15>
①なし=5名、②10分=1名、③30分=4名、④1時間=7名、⑤1時間30分=0名、⑥2時間以上=1名
4. 教員の勤務時間は長いと感じたか、短いと感じたか。
①長い=10名、②普通=7名、③短い=1名 …<16>

- (05) 教員の服務について疑問に思ったことはないか。あるとしたらどの点についてか。

四、教科に関する指導 (回答数18)

1. 教育実習中、指導案について担当教員から受けた時間はどのくらいか。 …<17>
2時間00分～30時間00分、平均10時間
2. 教育実習中、研究授業などの事後指導(高評)は何人から受けたか。 5人～15人、平均9人 …<18>
3. 教育実習中、研究授業などの事後指導(高評)は何時間受けたか。 平均3時間30分 …<19>
- (04) 学習指導案を作成する時に、学習指導要領はよく読んだか。
- (05) 大学で指導を受けた教科教育法は、教育現場での授業に役立ったか。

五、ホームルーム活動と生徒への指導 (回答数18)

1. 実習期間の終わるまでに、担当したホームルームの生徒の氏名は覚えられたか。 …<20>
①0%=0名、②10%=2名、③30%=0名、④50%=3名、⑤80%=6名、⑥100%=7名
- (02) 実習期間中、主に生徒の名前はどのように呼んだか。
- (03) 実習期間中、ホームルームの担当指導教員は生徒の名前をどのように呼んだか。
4. ST・LT以外の時間に、生徒とどのくらいの時間一緒に過ごすことができたか。 …<21>
総時間の平均13時間

六、部活動への指導 (回答数18)

1. 部活動は、何を担当することができたか。 …<22>
(サッカー)=3、(野球)=2、(バスケット)=2、(ラグビー)、(バレー)、(ハンド)、(バドミントン)(陸上)、(水泳)、(剣道)、(自然科学)、(吹奏楽)、(担当なし)=2
2. 実習中、総計何時間、部活動の場にいることができたか。 総時間 平均7時間20分 …<23>
3. 部活動では、どのような指導ができたか。 …<24>
①技術指導=12名、②生活指導=1名、③下校指導=2名、④安全指導=2名 (重複回答あり)

七、生徒指導と教育相談 (回答数18)

1. 生徒指導上、気になったことはないか。 …<25>
(頭髪)(服装)(スマホ)(遅刻)

- (02) 実習校の校則を読んだか。 …<35>
- (03) 校則を守っていない生徒に対し、実習校の先生が指導している場面に遭遇したか。
- (04) 遭遇した場面（校則を守っていない生徒）は、何について指導を要したか。
- (05) 校則を守っていない生徒がいたとき、実習生として指導したか。
6. 実習生として、校則を守っていない生徒に、何を指導を要したか。（服装）（自転車の二人乗り） …<26>
7. 個人的に話を聞いてもらいたいなどの相談を受けたか。
①受けていない=9名、②受けた=9名 …<27>
8. 相談を受けた内容は、何についてか。 …<28>
（勉強）（テスト）（進路）（部活）（いじめ）

八、教育実習の意義（回答数18）

1. 教育実習を受けて、教員の仕事は魅力的だと感じるようになったか。 …<29>
①なった=12名、②実習前と変わらない=6名、③魅力が感じられないようになった=0名
2. 教育実習を受けて、教員になりたいという気持ちが強くなったか。 …<30>
①強くなった=12名、②実習前と変わらない=6名、③弱くなった=1名
3. 教育実習を受けて、他の職業が良いと思うようになったか。 …<31>
①なった=4名、②実習前と変わらない=10名、③ならない=4名

九、採用試験の勉強（回答数20）

1. 採用試験の勉強はこれまでどのような教材で進めてきたか。 …<32>
①大学のテキストやノート=4名、②受験産業のテキスト=11名、③その他（センター教材・なし）=5名
2. 採用試験の勉強はこれまでどのような場所で進めてきたか。 …<33>
①大学=9名 ②自宅=11名、③その他（なし）=1名（①②の重複2名）
3. これまで、採用試験の勉強は、何時間くらいやってきたか。30～500時間（多数100～300時間） …<34>
4. 採用試験の勉強は今後どのような教材で進めるか。

- ①大学のテキストやノート=4名、②受験産業のテキスト=11名、③その他（センター教材・なし）=5名
5. 採用試験の勉強は今後どのような場所でおこなうか。 …<36>
①大学=6名 ②自宅=12名、③その他（なし）=3名（①②の重複1名）
6. 今後、採用試験の勉強は、何時間くらいやっていくか。一日平均2.7時間（0時間の4人除き計算） …<37>

十、教育実習前後の就活（回答数20）

1. 教育実習前の就活に、どのくらいの時間を費やしたか。 …<38>
日数0日～50日、時間0～200時間（ただし0社の10人は除き計算）
2. 教育実習前の就活は、何社（件）くらい試みたか。0～20社（ただし0社の11人を除き計算） …<39>
3. 就活をしてきた（しなかった）理由は何か。 …<40>
①教職だけに絞っている=9名、②教職が第一希望だが教職試験の合格可能性が低い=2名、③当初から教職だけを考えていない=7名、④教職は免許を取るだけで、当初から教職以外のものを主に考えていた=1名、無回答=1名
4. 就活を進めてきた会社等は、何を理由に選んだか。（複数回答可） …<41>
①教職課程と関連があるから=3名、②子どもを相手の仕事だから=2名、③大企業だから=0名、④将来性、安定性のある会社だから=8名、⑤雇用条件（給料や休日）がよいから=5名、⑥自宅から近いから=1名、⑦先生、親の縁故があったから=0名
5. 教育実習後、就活を行うか …<42>
①既に内定をもらい、以降は実施しない=2名、②既に内定をもらっているが、以降より良いところを見つけるよう努力する=4名、③教員採用試験の一次試験を受け、その後直ぐ始める=1名、④教員採用試験の一次試験の合否結果をみて始める=2名、⑤教員採用試験の二次試験を受け、その後直ぐ始める=0名、⑥教員採用試験の二次試験の合否結果をみて始める=0名、⑦教職に絞ってきたので、以降も教職以外の就活はしない=10

名、(その他 大学院進学を考える) = 1名

十一、就職活動と教職 (回答数20)

1. 採用試験が不合格だった場合、次年度はどのようにするか。 …<43>
 - ①教職の受験勉強のみ = 0名、②教職の受験勉強と非常勤講師 = 5名、③教職の受験勉強と常勤講師 = 6名、
 - ④他の職業 (希望職業・職種) = 7名、(②③重複1名)
 2. 採用試験が不合格だった場合、次次年度はどのようにするか。 …<44>
 - ①教職の受験勉強のみ = 0名、②教職の受験勉強と非常勤講師 = 5名、③教職の受験勉強と常勤講師 = 6名、
 - ④他の職業 (希望職業・職種) = 0名、(②③重複1名)
 3. 不合格が続いた場合、他の職業へという方向転換は何年後となるか。(前の質問に①～③と答えた者のみ) …<45>
 - ①3年まで = 0名、②4年まで = 1名、③5年まで = 5名、
 - ④10年まで = 1名、⑤20年程度 = 1名、変えない = 2名
- (04) 他の職業を考える場合、何を基準に考えるか。

十二、新しい就職協定と教職への影響 (回答数20)

1. 新しい就職協定を知っているか。 …<46>
 - ①よく知っている = 1名、②だいたい知っている = 10名、
 - ③あまり知らない = 7名、④ぜんぜん知らない = 2名
2. 新しい就職協定によって、自身の就活に影響を与えたか。 …<47>
 - ①大きな影響があった = 1名、②ある程度影響があった = 6名、③ほとんど関係ない = 5名、④全く関係ない = 8名
3. 新しい就職協定が、教育実習や教員採用試験に臨むことへ影響を与えたか。 …<48>
 - ①大きな影響があった = 0名、②ある程度影響があった = 4名、③ほとんど関係ない = 7名、④全く関係ない = 3名、

・無回答 = 1名

参考文献

- ・『教育実習 (パーフェクト) ガイド 実習生・受け入れ校必携』宮崎武 / 小泉博明, 小学館, 2015
- ・『教育実習安心ハンドブック』小山茂樹 / 学事出版, 2014
- ・『教育実践ハンドブック 教育実習の手引き』福岡教育大

学教育総合研究所, 教育実践ハンドブック編集委員会, 2013

- ・『教育十集ハンドブック 増補版』柴田義松 / 木内剛, 学文社, 2012
- ・『次世代教員養成のための教育実習 - 教師の初心を磨く理論と方法』次世代教員養成研究会編, 学文社, 2014
- ・『教育実習を考える』岩本俊郎, 北樹出版, 2012
- ・『教育実習研究』田中圭治郎, 仏教大学通信教育部, 2011
- ・『教育実習総説 第3版』池田稔, 学文社, 2011
- ・『教育実習の研究 3訂版』教師養成研究会, 学芸図書, 2011
- ・研究のひろば「"母校"での教育実習で考えたこと」勝見公紀『民主主義教育21vol.8現代政治と立憲主義 - 憲法教育の実践へ』2014.5, 全校民主主義教育研究会編, 同時代社
- ・「教育実習事前指導についての一考察 - 教育実習生の調査からみえてくるもの -」杉岡義次, 『仏教大学教職支援センター紀要第6集』仏教大学, 2014, p.43-p.64
- ・「教育実習における課題と工夫 - 望ましい教育実習の姿から考える -」和泉研二 / 河村義成 / 徳田修二, 『SYNAPSE』4月号 (vol.32), 2014.4.30, p.20-p.23
- ・「教育実習事前事後指導が及ぼす教育実習への影響から見た効果と課題 - より良い教職教育の在り方を求めて -」大西努 / 中尾道子 / 久保孝, 『環太平洋大学研究紀要第8号』環太平洋大学大学実践教育研究センター, 2014.3.20
- ・「教育実習における教育実習生の意識変容と成長に関する研究」磯崎尚子 / 西谷真美『富山大学人間発達科学部紀要第9巻第10号』2014, p.51-p.59
- ・崎濱秀行「教育実習事前指導における課題の探索的検討」阪南論集, 人文・自然科学編, vol.46, no.2, 2010